

僧侶（宗教者）の役割

●「人が環境を作る」

成人式の翌日、テレビの情報番組で放映されていた沖縄県の離島・石垣島で行われる「成人式」の模様を目を奪われました。ご存じの方も多いかも知れませんが、晴れて成人を迎えた新成人ひとり一人による感謝のスピーチ。両親や、あるいは育ての親と一緒にステージ上に立ち、マイクを通して両親や友人、広くは島民へ向けて、これまで関わってきたご縁ある方々への感謝の気持ちを伝えるという企画です。感謝の気持ちから紡ぎ出される素直なコメントが、聞く者の胸を打ちます。一方同じ沖縄でも、本島の荒れた成人式とは比較しても比較の対称が違うのではないかと見紛うほど対照的な新成人の姿に愕然としてしまいます。

そもそも成人式のルーツを辿ると、奈良時代に遡るようです。同時代に起こった元服に始まる日本特有の風習だそうで、ヨーロッパやアメリカなどではこのような式典はありません。元服とは、奈良時代以降の日本に於いて、男子の成人を示すものとして行われた通過儀礼の儀式の事です。「元」は首（頭）、「服」は着用を表します。つまり「頭に冠を付ける」という意味になります。ちなみに公家の女子の成人式は「裳着（もぎ）」と言います。

もともと成人式は、法律の趣旨にもあるように、一定の年齢に達した青年を行政などが祝福・激励し、これに対して参加者が、責任ある自立した社会人としてより良い社会の創造に貢献していく事を決意し、それを広く社会に啓蒙する為のものでした。

しかし現代の成人式では、式典中にもかかわらず会場内で携帯電話を使う、久しぶりに会った友人との談笑などに熱中する余り、主催する自治体首長などの式辞・講演に関心を示さず私語が収まらない。そして一部では、数人の新成人グループが会場で暴れ回って式典を妨害するケースなども見受けられます。公務執行妨害を理由とした事件を中心に、毎年のように逮捕者が出るほどの騒ぎに発展した市町村がニュースで取り上げられています。成人式が本来の意味目的から逸脱して、中学や高校の同窓会的な意味合いで捉えられるようになってきているのではないのでしょうか。本来一人前の大人としての決意をすべき場である成人式が、かえって若者のモラル低下を露見させる場となっている現状に言葉を失ってしまいます。このような現象の事を成人式での七五三現象と言うそうです。

「環境が人を作る」と言いますが、確かに一理あると思います。自分の置かれている環境によって、自分の思考や言動に影響を与えている事は確かでしょう。ならば一歩踏み込んで、「人が環境を作る」という捉え方をしたいものです。そういう捉え方が出来る新

成人を、家庭の躾教育は基より、地域全体で輩出していきたいものです。その意味で大人達は、自分の言動や姿に責任を持たねばなりません。石垣島のように、新成人達が大人に誇りを持っているような環境作りを心掛けたいものです。

●「ありがとう」のお題目

十二月二十四日と言えばクリスマスイブという日です。私にはあまり関係のない日ですが、皆様はどこで誰と過ごされましたか？欧米では「クリスマスは家族が一堂に会する日」という事で、どちらかと言えば日本のお正月に近い風習のようです。いずれにしても世界各地の至る所で、目を引く華やかなイルミネーションが見慣れた街をXmasムード一色に染め上げます。

昨年の十二月二十四日、私は末期癌患者の枕元で、間もなくお亡くなりになるA氏に寄り添い、そのA氏のご家族の皆様と一緒に過ごしました。

地元のK病院からご連絡があり駆け付けました。「あと数日でお亡くなりになるA氏の心を安らかにし、ご家族の心のケアをしてほしい」と…。

心の闇の中で悲痛に歪んだ表情が徐々に和らいでいく瞬間、僧侶（宗教者）としての責務と使命を改めて感じました。初めて顔を合わせるA氏と私。A氏にとって七十数年という短くも長いその人生最後の会話をさせて頂くのです。信仰心なんてものを持たないA氏は、人生の中で何を願い、何にすがり終焉を迎えれば良いのか？誰もが抱

くであろう死に対する恐怖を人一倍抱いておられました。そんなA氏の恐怖を払拭するお題目は「ありがとう」という感謝の念だとお勧めいたしました。なぜなら、私達がお唱えるお題目「南無妙法蓮華経」は、お互いに支え合いの中で生かし生かされているという宇宙の真理、言い換えると「慈悲」や「慈愛」という言葉に由来しますが、つまり大きな和という本質が内包された、まさに「感謝の念」に他ならないからです。直接「南無妙法蓮華経」とお唱え頂けるのが理想なのですが、A氏の人生にとって馴染みがあり、心の奥底までシッカリと腑に落ちる言葉でなくてはA氏にとっての安寧には至らないと考えたからです。

ちなみにA氏には二人の息子さんがおられるようです。肉体が滅しても、確かにあったA氏の人生そのものは息子さん、そして孫さんへと子々孫々永遠に生き続けます。しかもそれは、肉体としては勿論の事、その精神性の伝承までもが子々孫々に受け継がれていくのです。そうやって私達は永遠の命を生きていくものだと思信しております。

傾眠状態にあるA氏の病床を離れる時、パツチリと目を開き、安らかなお顔で最後におっしゃったA氏にとってのお題目「ありがとう」の聲が、今でも耳に残っています。緩和ケアの看護師長から「医療者では踏み込むことの出来ない領域である

だけに変感謝を受けました」とのお言葉とともに、「患者のご家族も胸のつかえが取れたようで大変感謝しておられました」というご連絡を頂きました。

いただいた感謝の言葉は、僧侶としての自分自身を戒めるメッセージとして大切に受け取らせて頂きたいと思っています。

以上記した一連のお話を読まれて、読者の皆様はどの様にお感じになりましたか？そうです。今や僧侶（宗教者）はお寺で法事やお葬式を厳修（厳かに執り行う）しているだけの存在ではありません。また病院も医療関係者だけの聖域ではなくなりつつあります。かつての病院の医師は、

ほぼ例外なく患者の病気を治すことのみに関心を持つ存在でした。しかし一九九〇年代頃から緩和医療に対する認識の高まりを背景に、終末期の患者の苦しみはどう向き合うべきか苦悩する医師が増えると同時に、

ホスピス、ビハールなどを通じ多くの僧侶（宗教者）が終末期医療の現場に関わり、患者の苦悩に寄り添うようになりました。緩和医療の現状を考える時、僧侶（宗教者）が患者の「死」を前に無力感に襲われる医師らの苦悩にも寄り添って、共に患者の理解者として歩んでいくことがこれまで以上に求められていく事でしょう。心の安寧を求める患者様はじめ、ご家族の方々、そして医療関係者らが数多おられます。人に寄り

添い続ける事が許された僧侶（宗教者）に課せられた役割は大きいと自覚したい。

ただ、魚津市はもとより、富山県、引いては北陸全域でも、臨床カウンセリングに従事できる僧侶（宗教者）はほぼ皆無と言っていい悲しい現状があります。マニュアルも無い、答えも無い領域だけに、大変難しい分野である事は間違いありません。確固たる信念と、それを揺るぎないものにする日々の精進が不可欠である事は言うまでもありません。

私自身、目の前のご縁ある方に向き合い続け、一人でも多くの同志を牽引できるよう努力精進を誓います。『**真理は現実の只中にあり**』です。一人でも多くの同志が、大きな一歩を踏み出されん事を願って…。

「補足」

※ホスピス：末期癌（がん）患者など死期の近い病人を対象に、延命処置を行わず、身体的苦痛を和らげ、精神的援助をして生を全うできるように医療を行う施設。

※ターミナルケア（終末期医療）：重い病気の末期で不治と判断されたとき、治療よりも患者の心身の苦痛を和らげ、穏やかに日々を過ごせるように配慮する療養法。

※ビハール：ビハール（vihar）は、ンスクリット語で僧院、寺院あるいは安住・休養の場所を意味し、現代では末期患者に対する仏教ホスピス、または苦痛緩和と癒しの支援活動を差す。

合掌 副住職 谷川寛敬



お釈迦様の涅槃団子作りに
参加しませんか！



とき……2月7日（日）

午後1半時～

場所……「宝屋」さま工場

皆さんで、涅槃団子を一緒に作りませんか！
参加される方は、お寺までご連絡をお願いいたします。
直接いかれるか、お寺に集合して、車に乗り合って行きます。
大変な功德を積まれること間違いなしですね。